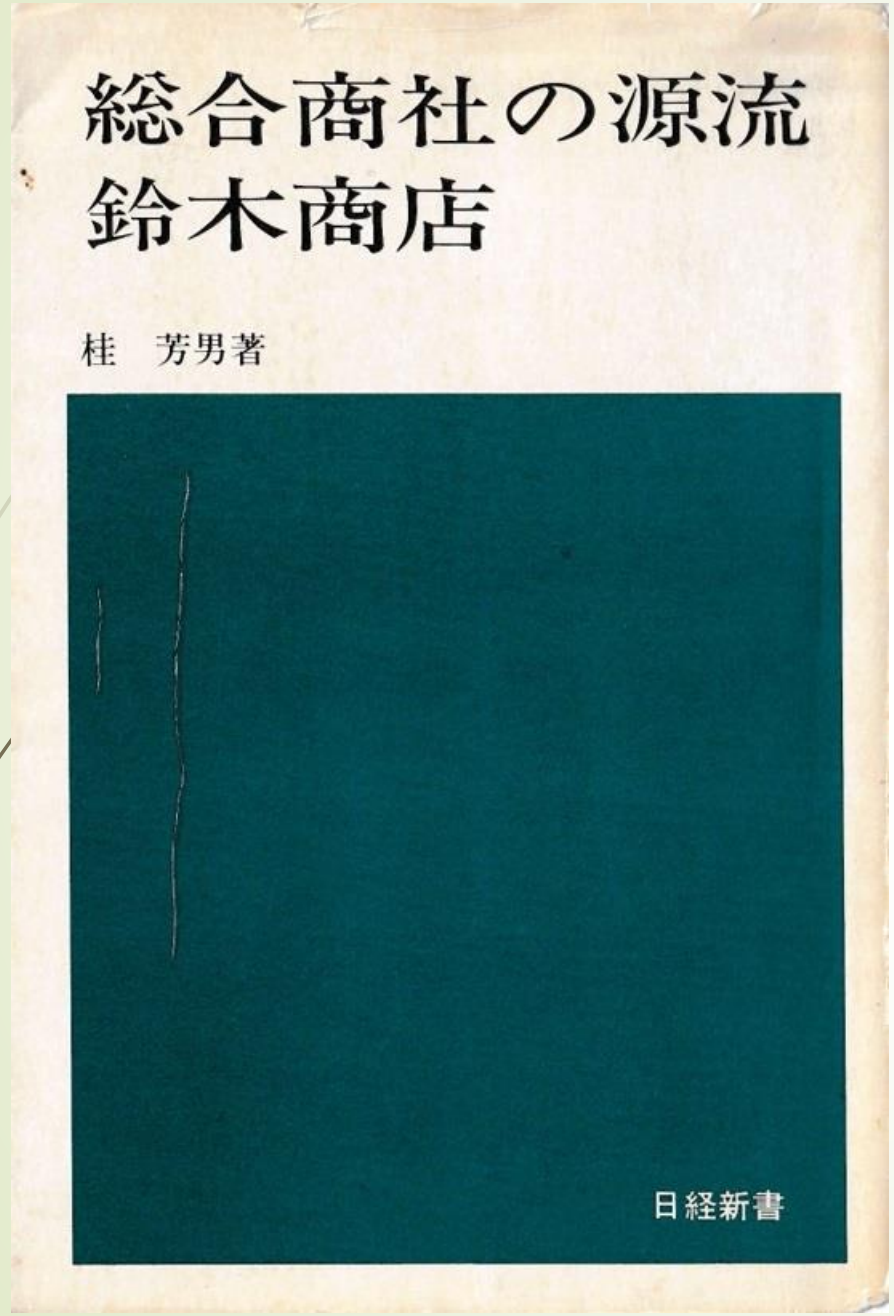
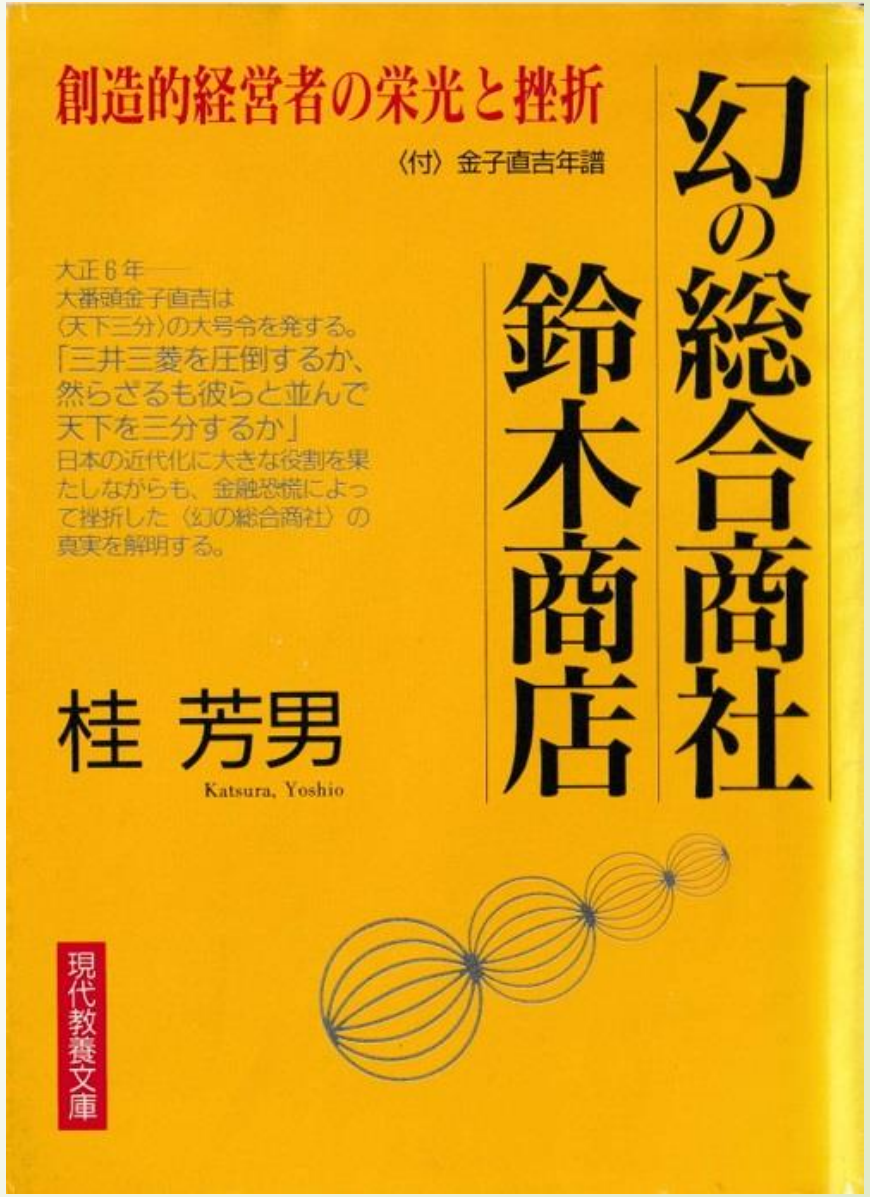
鈴木商店創業150年・鈴木商店記念館開設10周年の集い

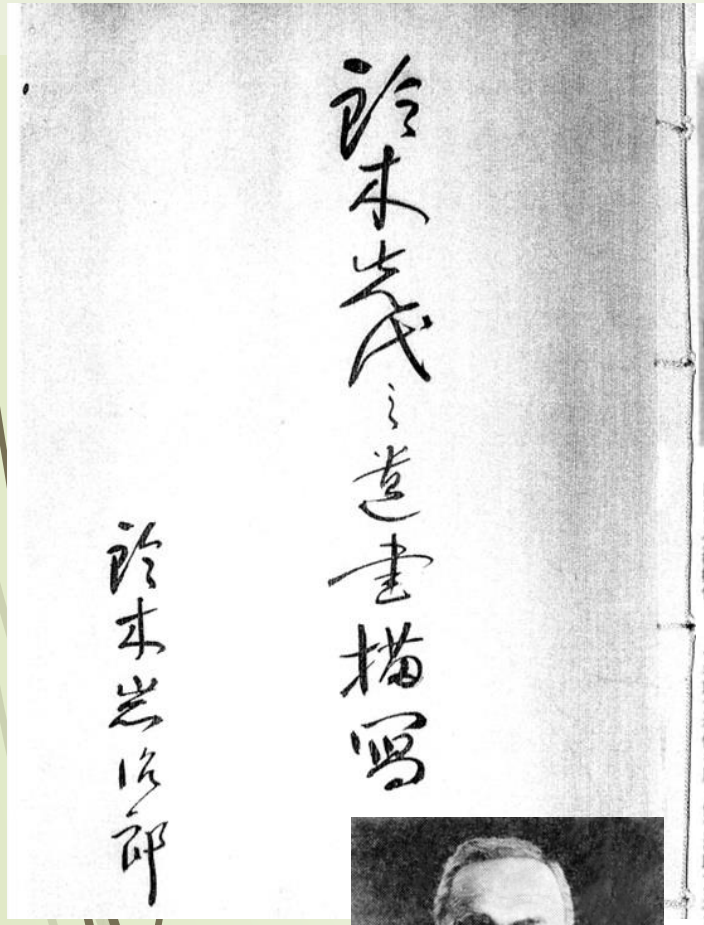
～幻の総合商社「鈴木商店」誕生～

辰己会 鈴木商店記念館
編集委員長　小宮由次


総合商社の源流
鈴木商店
桂　芳男著
日経新書


幻の総合商社
鈴木商店
創造的経営者の栄光と挫折
〈付〉金子直吉年譜
大正6年――
大番頭金子直吉は
〈天下三分〉の大号令を発する。
「三井三菱を圧倒するか、
然らざるも彼らと並んで
天下を三分するか」
日本の近代化に大きな役割を果
たしながらも、金融恐慌によっ
て挫折した〈幻の総合商社〉の
真実を解明する。
桂 芳男
Katsura, Yoshio
現代教養文庫

鈴木先代(岩治郎)之遺書描写（回想録）



鈴木先代岩治郎之遺書描寫

二代　鈴　木　岩治郎

大日本武州川越城主十五万石
松平大和守藩中士
鈴木徳左右衛門儀浪人シテ
武州農民ト相成リ百姓ヲ行フ
仲　長男　我父　徳次郎
　次男　藤吉
　長女

我実父鈴木徳次郎儀若キ時ヨリ身持悪シクニ付親共ノ身込ヲ以テ同村何某ヘ養子ト縁付他家ヘ行キ其ノ身持モ悪シク遂ニ一軒家ヲ潰シテ我生家ハ次男藤吉ヘ譲渡シ置キ其ノ儘江戸表ヘ参リ然ルニ右百姓ヨリ外ニ覚ヘタル手ニ職モ無ケレバ唯致方ナク武家奉公ニ相住ミ居リ其ノ折伏モ江戸麹町一番町ニテ五千五百石殿小堀某方ヘ相勤メ居リ小石川傳通院前安土坂家持主平民板屋根高親長女ヨネ右ハ我ガ母親コト同次男由兵衛此ノ人母親後継此ノヨネ子儀ト夫婦ノ縁組サヽヤカナル裏家住居麹町一丁目ニテ兄文治郎天保九年戊出生仝十二年丑七月二十一日次男岩治郎出生仝弘化三年丑三男徳蔵出生尤モ小石川金光寺坂上居住ニテ我々男子バカリ三人兄弟能在リ之ノ儀我等身上モ余リ心配致シ両人ヘモ辛ク考ヘモ仕ラズ折伏今日ハ旧暦四月九日ニ相成リ母様祥月命日ニ相当リ一寸認メ掛リ明治十四年己五月五日ノコト我父徳次郎素ヨリ書類ヲ相好ミ書数讀ムコトハ一人前勝レ誠ニ珍シク本商家一軒有合セ書類皆々讀仕舞申候又外書付数多ク持居ル家ニ有合セノ分代価無シニテ二三軒分讀ミ盡シタル右様人物ニ御座候得ヘドモ無何分徳川公旧幕厭制時故何カト有フク（就職）コト出来申サズ折柄我等兄弟出生致シ候ヘバ其ノ日働キ稼グニ足リ兼ネ日雇致シ一日ノ稼ギ値僅カ天保銭二百匁ヨリ三百匁ヅツ頼リ親子四人ノモノ露命ヲ繋グ尤モ親共我身ニ手仕事ヲ覚ヘ（之無ク候）家裏方手廻リ日雇人又ハ人ノ使或ハ荷車輓キ又屋敷方ノ草苅其ノ外色々様々心盡シ致シ候ヘドモ是ト定条（定職）モ無ク候ハバ障時多ク休有リ殊ニ親共大酒飲ミ之故手許大困難母モ手仕事致シ候ヘドモ我等幼少ニテ手紛レ何カト不都合岩治郎五才ノ時小石川傳通院前コヽリ坂上手転宅致シ其ノ折伏徳蔵出生致シ其産後母ハ引續キ大病ニ罷合ヒ大困却介抱致ス人モ無シ一日休ムト其ノ日暮ラシニ困リ毎日早出致シ一人半働キ我々兄弟父帰リヲ待入リ候事我五才ニテモ辛キコト故克ク承知致シ居候其ノ明年米モ諸品モ下値ニ相成リ何分丙丑年米高天保銭一百匁ニ付白米五合ヨリ一人半相働キ三百匁位稼ギ四五人養ヒ殊ニ母大病ニ父親ノ心痛甚シク後日話ニ夜五時ヨリ一里アル麹町マデ参リ衣類二枚持チ質入致シ八百匁借リテ小石川マデ一里帰リタル時ニハ忘レ兼ネ此儀幾度モ我々ニ御話有リシ候明年弘化四年未五月麹町一丁目相模屋裏家ヘ軒宅致シ参リ母病氣追々全快兄文治郎儀年十一才春同所山元町近江屋甚平方ヘ奉公ニ参リ但シ菓子商江戸名所煎餅職業此ノ家ニ十七才迄住居リ之ヨリ江戸表ヲ飛出シ諸国渡人菓子職致シ東海道ヨリ大阪讃岐長州下関神戸之ヨリ相廻リ文久二年亥四月江戸表ヘ帰宅致シ文治郎二十六才ニ相成リ居リ候也岩治郎儀年八才五月麹町四丁目魚商泉屋吉右衛門方ヘ奉公同様ニ参リ此ノ家主人五十才余ニテ子無シ唯遊ビ事ニ日ヲ送リ毎日賭博バカリ打廻リ我ガ家ニ帰リ其ノ身持甚ダ悪シク折伏我ガ家ニ度モ近火ニ出会ヒ三三ケ年間據処無ク裏借家住居ト相成リ行キ日々ノ容易其六ケ敷白米百匁百五十匁冠買廻リ其ノ時我十二才子供乍ラ小々バカリ御為金貯リ居リ持チ矢張リ米代取替ヘ薪木代何カト貧苦ニ相暮シ誠ニ非人同様ノコトニ成行キ私ノ不運申ス迄モ無ク人々右様ノ家ニ居リ候テハ其ノ甲斐之無ク是非ニ際買ヘト勧メニ預リ尤モ八才ヨリ参リ候宅故縁と申立親宅ヘ帰リ度キコト数度帰ル度毎ニ甚タ厳シク懲シメノ為仕置キ会サルノコト手ヒドク之ヨリ辛抱致居候然ル故ニ泉屋方悪シキ儀日ニ〳〵相増シ據処無ク十三才三月泉屋宅ヲ御暇承リ親父宅ヘ帰リ罷在候也然ニ兄文治郎儀業子商ニ相勤メ同商条大ニ勧メニ預リ我モ望ニ任セ即チ麹町三丁目谷町近江屋喜平衛様方ヘ同月二十日菓子商同家奉公住致シ嘉永六年三月ヨリ（十三才ヨリ）満八ケ年定約ト致シ相勤メ居リ候也

初代　岩治郎（1841～1894）

三男徳蔵儀出生後母大病ニ承合ヒ数度難ニ遭ヒ夫ニ付父上ニモ長男次男奉公ニ差出シ置キ候ヘバ三男衛ク満三年七ヶ月春五才嘉永二年二月一日ヨリ父姉嫁付先甲斐ノ国八代郡大島村観応寺其ノ方ヘ遣レ行キ素ヨリ身内ノ事岩治郎徳蔵ノ両人ノ中一人ヤル貰ラウノ約定之有候儀幸トシテ父一人ニテ徳蔵連行キ先方ニヤリ切リニ渡シ帰リ折伏シ江戸表ヘ麹町四丁目小西裏ヨリ二月五日午前九時ヨリ出火始マリ折伏西北風烈シク大火ト相成リ何千戸多数焼失麹町永田馬場ヨリ愛宕山芝浜手迄凡ソ一里半余焼失其ノ折文治郎主家同岩治郎主家親元家共皆々一時ニ焼失折伏父ニハ留守中母一人病床ニ伏シ居リ候処矢張リ焼失親類方ノモノ参リ道具類少シ取出候ヘバ丸焼ケ其ノ儘親類方ヘ同居ノ処親父甲斐ヨリ帰宅致シ我家無シニ付四谷天主横丁ヘ借宅致候其ノ処ニテ母病介抱致居リ候ヘバ追々重病ト相成リ養生モ叶ハズ午後四時ニ死去致シ嘉永三戊四月九日文治郎十三才岩治郎九才徳蔵五才兄弟三人外ニ四五名ニテ墓送リ致シ葬式万端不都合ニテ誠ニ哀シキ事他所仮宅ニテノコト母ノ若死気ノ毒ノ至リ後日佛事ニテ萬事葬ヒ致スコト父上ニハ其ノ後麹町ヘ帰リ後二度家内持チ居リ候然シ此ノ女身持悪シク五ケ年連添ヒ夫婦別レ致候又三度目家内持居リ候四年バカリ連添後夫婦別レトナリ近江屋喜平衛殿方ヘ岩治郎儀十三才ニテ奉公住居リ候テヨリ菓子職大ニ勉強致シ候処此ノ家ハ資本金無シ借金百五十円バカリ所々借有リ凡テ現金買物致シ右借金方小々ヅツ携込ミ居リ候也此ノ家主極ク正直者二十八才ニテ養子ニ参リ四十九才ニテ死去致候ヘドモ我一代百五十円借金返納出来兼ネ殊ニ一人娘トメ又後女一人花両人ノ処後妻不縁ニ相成リ喜平衛死去後岩治郎二十年ヨリ二十一年冬迄住居リ候処親類ノ者強ク思込ミ居リ近江屋身内与三郎ナルモノヘ委皆渡シ岩治郎二十二年四月同主家ヲ出テ手職方相働キ居リ候文治郎十三才ヨリ麹町山元町近江屋甚兵衛方奉

鈴木岩治郎の生い立ちとその家系

生年：天保12(1841)年
没年：明治27(1894)年

川越城本丸（喜多院）

祖父　鈴木徳左右衛門　武州川越藩 / 浪人 / 武州百姓

父　長男　徳次郎

母　妻　ヨネ子

次男　藤吉

長女

天保12(1841)～明治27(1894)
次男　岩治郎

妻　（西田）よね

天保9(1838)～明治20(1887)
長男　文治郎

弘化3(1846)生れ
三男　徳三

二代目　岩治郎

次男　米太郎

長男　徳治郎

三男　岩蔵

長崎・平野屋、下関・桝屋で菓子修行

◇文久2(1862)年、父・徳次郎死去。元治元(1864)年、岩治郎23歳の時、兄・文治郎に倣って菓子修行のため幼馴染の金次郎と共に長崎に旅立つ。

↓

◇甲斐路八王子を振り出しに途中、兄・文治郎の知人の菓子店を始め各地の菓子店で働きながら長崎にたどり着く。（シュガーロード）

↓

◇長崎船大工町の菓子商「平野屋」にて足掛け4年菓子修行。主人の信用絶大、砂糖の買い入れ業務を全面的に任され、養子縁組を求められる。

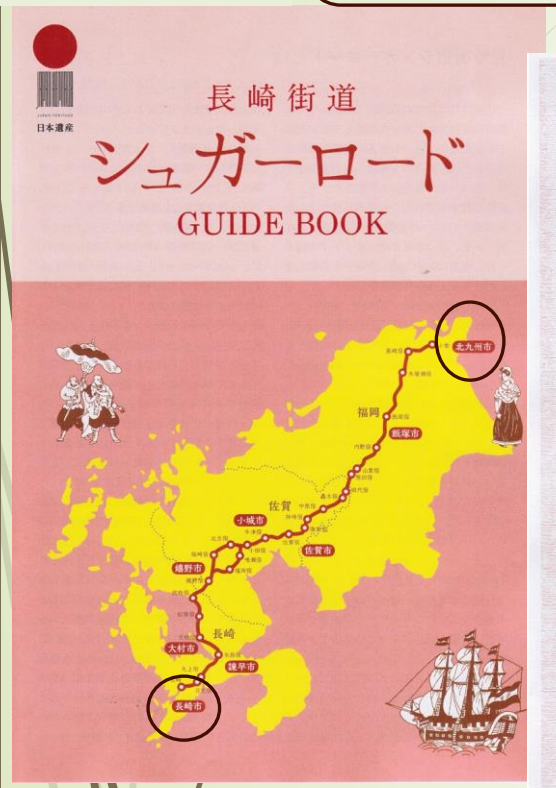
↓

◇慶応4(1868)年、平野屋を退職し（岩治郎27歳）、長崎街道を引き返し下関・増田初蔵（「桝初」こと桝屋）の下で再び修行、共に修行した金次郎（増田に婿入りし亀の子煎餅の“江戸金”を創業）に別れを告げ兵庫に向かう。

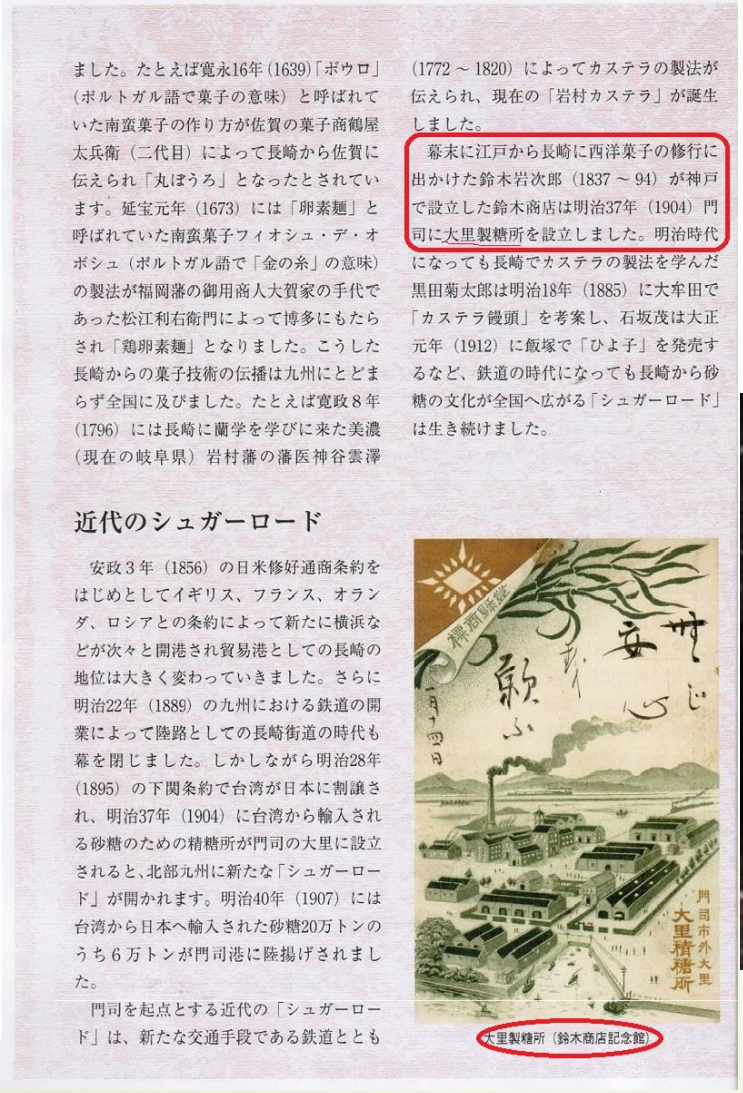
↓

◇明治5(1872)年、神戸弁天浜の辰巳屋神戸出張所に雇われる。（岩治郎31歳）

砂糖の文化や菓子の技術を求めて“シュガーロード”（長崎街道）を目指し長崎船大工町へ　～大里から長崎230km～



小倉・大里から長崎へ
230km



ました。たとえば寛永16年（1639）「ボウロ」（ポルトガル語で菓子の意味）と呼ばれていた南蛮菓子の作り方が佐賀の菓子商鶴屋太兵衛（二代目）によって長崎から佐賀に伝えられ「丸ぼうろ」となったとされています。延宝元年（1673）には「卵素麺」と呼ばれていた南蛮菓子フィオシュ・デ・オボシュ（ポルトガル語で「金の糸」の意味）の製法が福岡藩の御用商人大賀家の手代であった松江利右衛門によって博多にもたらされ「鶏卵素麺」となりました。こうした長崎からの菓子技術の伝播は九州にとどまらず全国に及びました。たとえば寛政８年（1796）には長崎に蘭学を学びに来た美濃（現在の岐阜県）岩村藩の藩医神谷雲澤（1772～1820）によってカステラの製法が伝えられ、現在の「岩村カステラ」が誕生しました。

幕末に江戸から長崎に西洋菓子の修行に出かけた鈴木岩次郎（1837～94）が神戸で設立した鈴木商店は明治37年（1904）門司に大里製糖所を設立しました。明治時代になっても長崎でカステラの製法を学んだ黒田菊太郎は明治18年（1885）に大牟田で「カステラ饅頭」を考案し、石坂茂は大正元年（1912）に飯塚で「ひよ子」を発売するなど、鉄道の時代になっても長崎から砂糖の文化が全国へ広がる「シュガーロード」は生き続けました。

近代のシュガーロード

安政３年（1856）の日米修好通商条約をはじめとしてイギリス、フランス、オランダ、ロシアとの条約によって新たに横浜などが次々と開港され貿易港としての長崎の地位は大きく変わっていきました。さらに明治22年（1889）の九州における鉄道の開業によって陸路としての長崎街道の時代も幕を閉じました。しかしながら明治28年（1895）の下関条約で台湾が日本に割譲され、明治37年（1904）に台湾から輸入される砂糖のための精糖所が門司の大里に設立されると、北部九州に新たな「シュガーロード」が開かれます。明治40年（1907）には台湾から日本へ輸入された砂糖20万トンのうち６万トンが門司港に陸揚げされました。

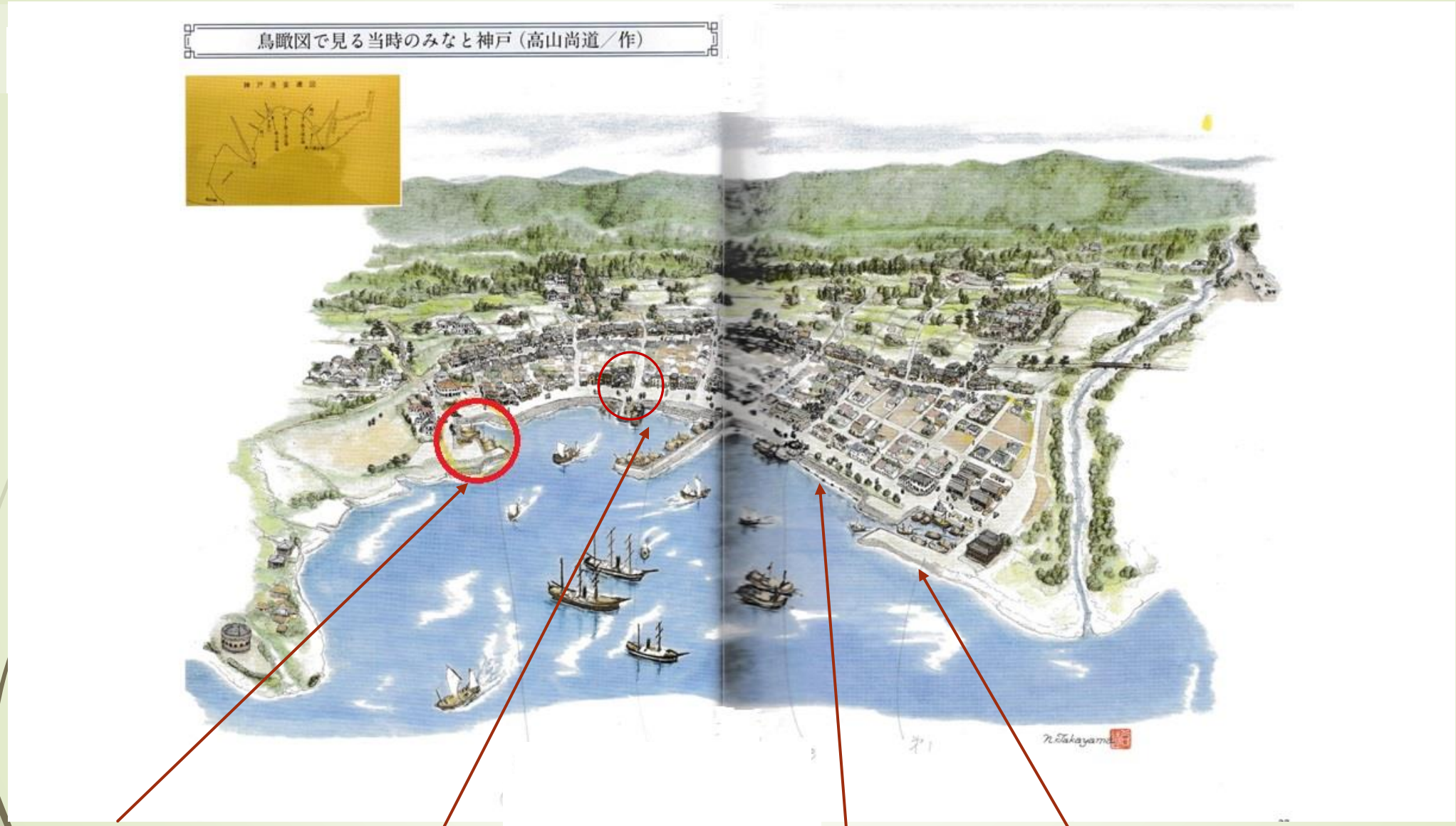
門司を起点とする近代の「シュガーロード」は、新たな交通手段である鉄道ととも

大里製糖所（鈴木商店記念館）

幕末に江戸から長崎に西洋菓子の修行にでかけた鈴木岩治郎が神戸で設立した鈴木商店は、明治37年門司に大里製糖所を設立しました。

長崎船大工町のシンボル的な「福砂屋」（寛永元(1624)年創業）

弁天浜埋立以前のみなと神戸（弁天浜尻波止場）



第4波止場
（弁天浜尻波止場）

第2波止場(後・国産波止場)
（後の第3波止場）

第3波止場
（後の第2波止場）

第1波止場

宗家「辰巳屋」の暖簾を引き継ぐ松原商店

松原恒七(1819～1881)

辰巳屋嘉兵衛

松原夏蔵　播州姫路酒井藩士

辰巳屋松原商店（初代）

暖簾分け

藤助(幼名：藤松)

妻　なを

1824年　寛成12(1789)年～万延2(1861)年1.24

二代

（次男）恒七（幼名：藤吉）

（長男）政七

（長女）はる

次女）まさ

（三女）ひさ

柳田卯兵衛

カネ辰柳田商店

柳田伊助

暖簾分け

暖簾分け

暖簾分け

明治7(1874)年

鈴木岩治郎

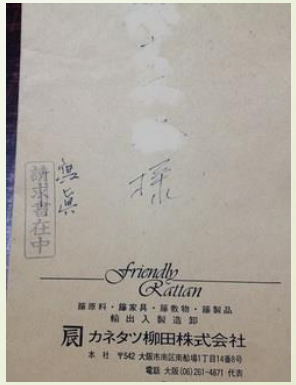
カネ辰鈴木商店

藤田助七

カネ辰藤田商店

柳田富士松

養子

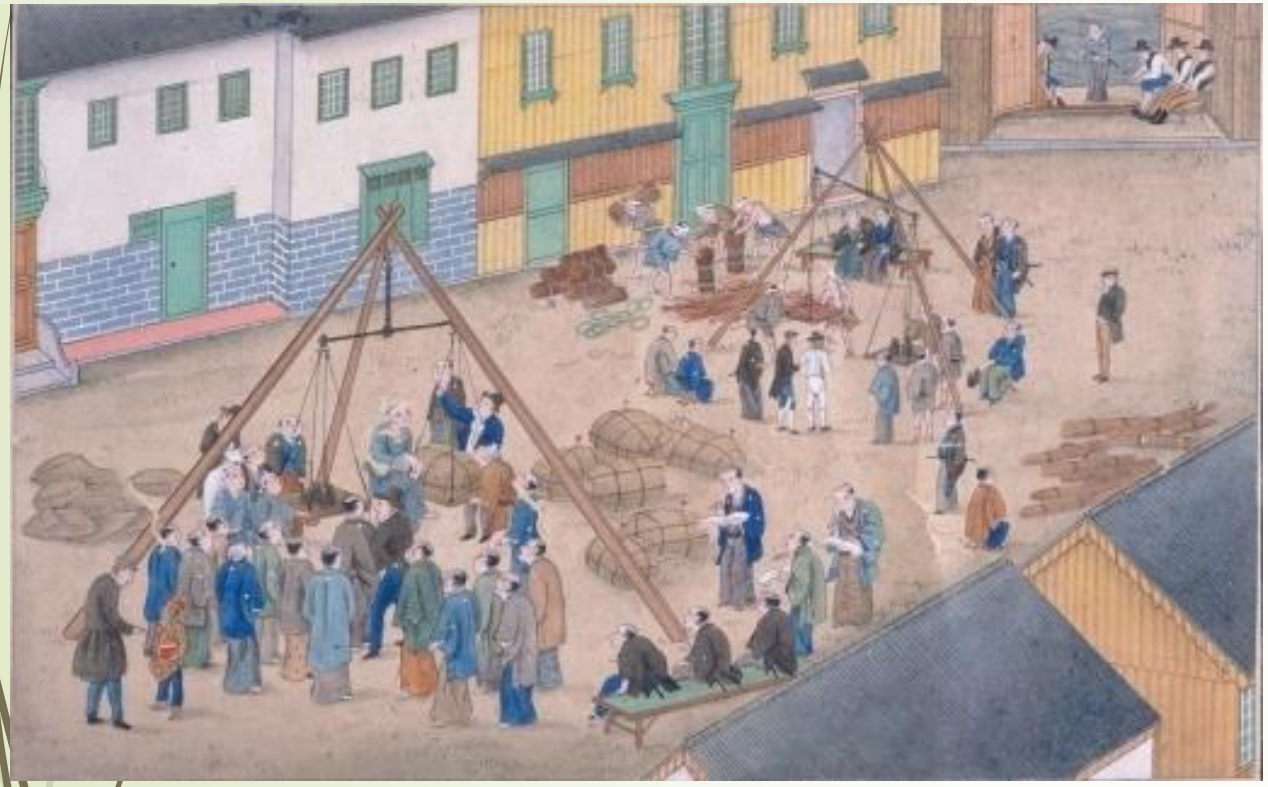


カネ辰柳田商店

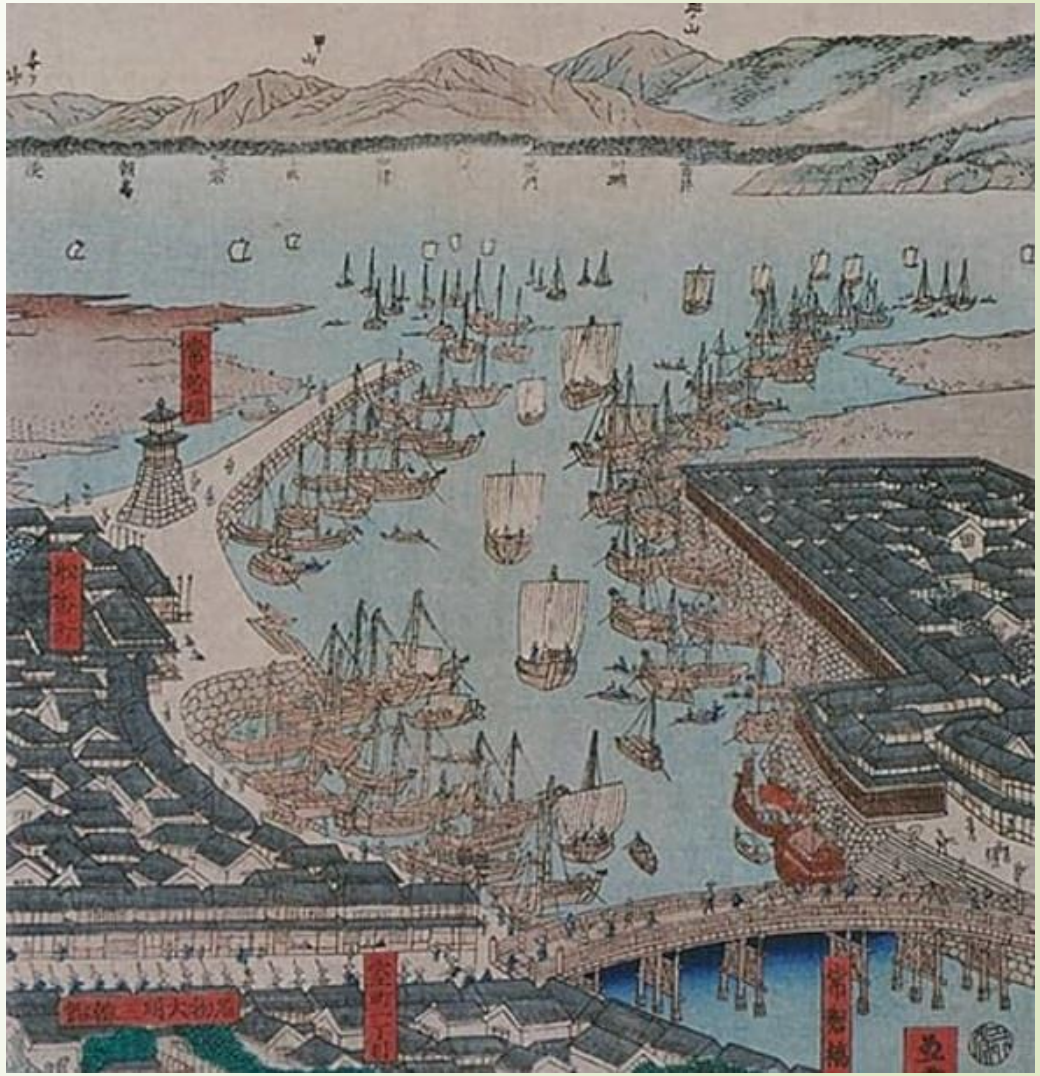
辰己屋嘉兵衛と姫路特産“白なめし革細工”

歌川広重画
「播州姫路革店の図」

砂糖は西から　～長崎・出島から大阪、江戸へ～

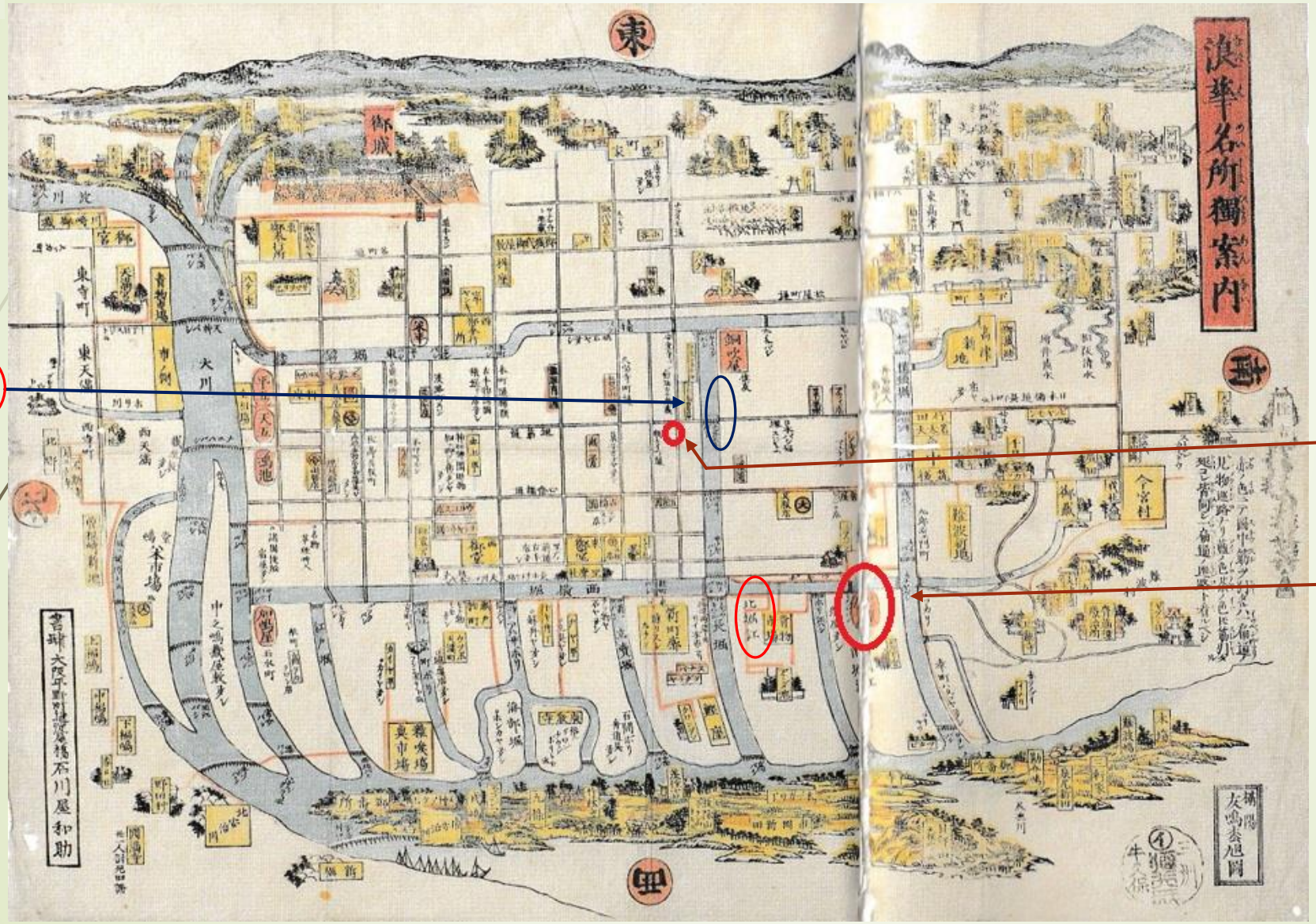


長崎出島・砂糖の検量



続々入港する砂糖船（イメージ）

大阪長堀橋付近図（浪華名所独案内；天保年間(1830～1844)



辰己屋神戸出張所は弁天浜から～岩治郎辰巳屋恒七に雇わる～

殘務整理と共にそつくり岩治郎に讓渡したので、此處で辰巳屋の商号ヵネ辰をその儘名乘つて一本立の砂糖屋となつた。思へば裸一貫のさすらひの一青年が堅忍不拔の志を立てゝ東西に流浪し、數年にして漸く獨立の旗上がなつたのである。

砂糖屋の旦那になつても小金が出來ると、江戸へ歸らうとしたことが何遍もあつたが賣掛金の回收難に引留められ、ぐず〳〵して居る間に店は發展する一方だ、發展すればモット儲け度いが人情で、砂糖の傍ら銀の仲買の業を初めたものだ。其の当時は未だ不換紙幣の時代だから外國貿易決濟に要する銀貨弗と紙幣とを兩替する爲替業者が、何處の開港場にもあつたものだ。勿論神戸でもこう云ふ連中が集つて會員組織の神戸取引所と云ふのを設けた。岩治郎は擧げられてそこの理事に就任した、之が出世の發端である。

貧乏人の小伜で漉餡を捏ね廻すことゝ煎餅を燒く事や菓子を作る位は習つたが、「イロハ」のイの字も敎はつたことのない、岩治郎が何時の間に何處で誰方に習つたものか、彼は曲りなりにも意味の通つた往來文を書覺えていた。之が理事と仰がれ、委員長と奉られる主因であるが、彼は幼にして頴悟物事を取扱ふに粗末なことは微塵もなかつたと云ふ。

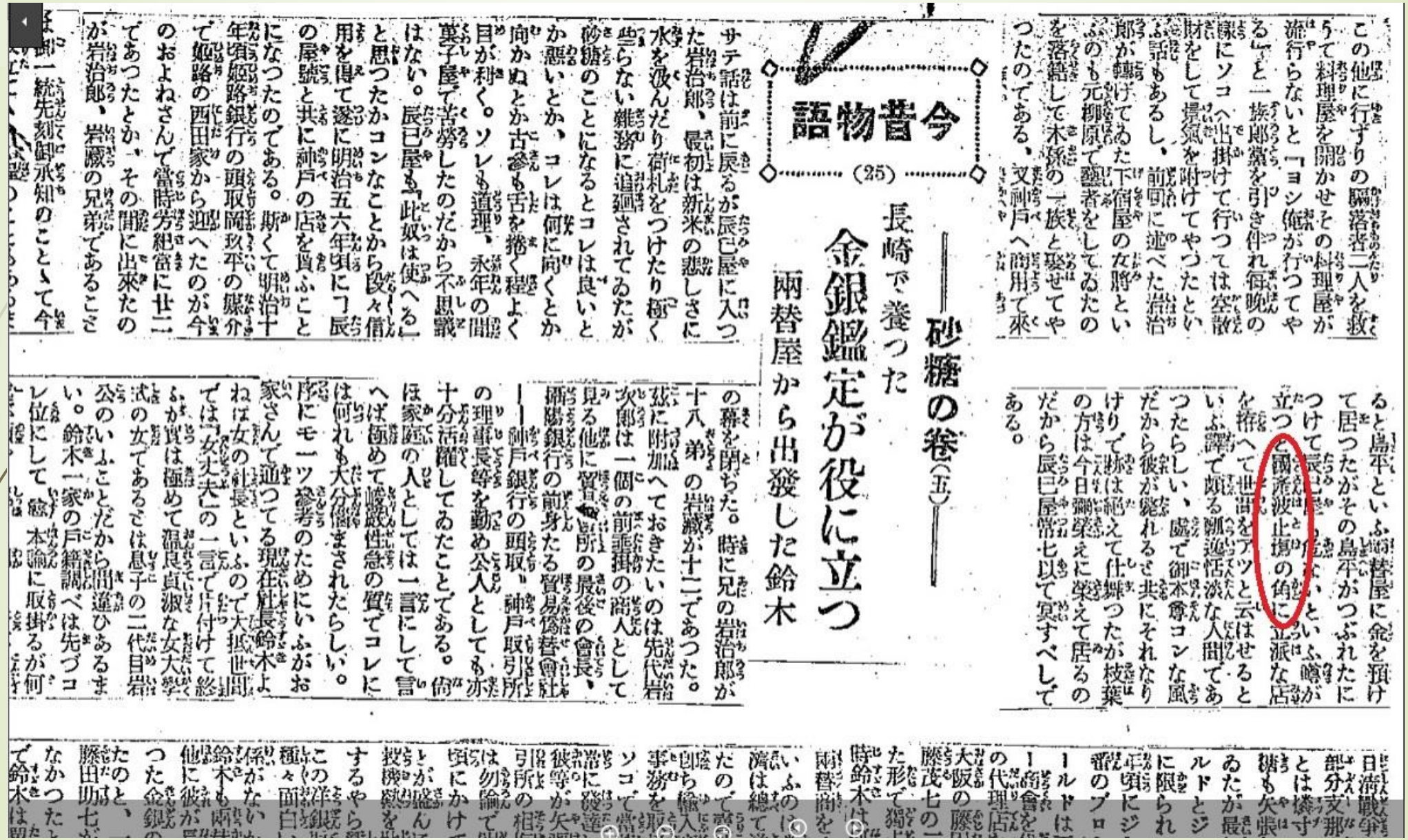
脚氣には懼るし、再びどん底生活に陷つたのを近所のお妾さんに救はれたとのことだ。病氣が治つて仕事に住込む当のないまゝにキチョウ屋と云ふ宿屋の客引をしていた。

岩治郎辰巳屋恒七に雇はる

宿屋の客引をしていたのでは、ウダツが上らない、どこか確かりした處へ住込んで新規巻直しに出直さうと八方傳を求める中、深見某（庄吉の祖父）と懇意になり、深見の紹介で辰巳屋恒七と云ふ雜貨屋に雇はるゝことゝなり今度こそは火の中水の中でも辛棒して身を立てようと一生懸命に働き、恒七に信用せられた。其の頃恒七は資本も相当あり開港景氣に目を付け兵庫辨天濱に出張所を設けたので岩治郎は其所の下つ端にこき使はれていたが、根が利口な男だし、長崎仕込の菓子職人のことではあり煎餅を燒くことは江戸前の腕を持つているし砂糖の鑑別はお手の物だ。だんだん見拔かれて出世し先輩を凌駕して番頭になつて仕舞ひ、得意の鑑識と商才で店は次第に繁昌した。今迄の出張所も昇格して支店と云ふ事になつたが辰巳屋が後病氣の爲め此の支店を廢止することになつたので此の店の

恒七は兵庫弁天浜に出張所

弁天浜から国産波止場の角（内海岸通）へ（神戸新聞“今昔物語”）



この他に行ずりの瞬落者二人を救うて料理屋を開かせその料理屋が繁昌らないと「ヨシ俺が行つてやる」と一族郎黨を引き伴れ毎晩の様にソコへ出掛けて行つては空散財をして景氣を附けてやつたという話もあるし、前回に述べた岩治郎が轉げてゐた下宿屋の女將というのも元柳原で藝者をしてゐたのを落籍して木孫の一族と娶せてやつたのである、又神戸へ商用で來ると島平といふ替屋に金を預けて居つたがその島平がつぶれたにつけて辰巳屋も危いといふ噂が立つと國產波止場の角に立派な店を拵へて世間をアッと云はせるといふ譯で頗る瀟洒恬淡な人間であつたらしい、處で御本尊コンな風だから彼が亡くなると共にそれなりけりで跡は絶えて仕舞つたが枝葉の方は今日繁榮えに榮えて居るのだから辰巳屋常七以て冥すべしである。

今昔物語（25）

砂糖の卷（五）

長崎で養つた金銀鑑定が役に立つ

兩替屋から出發した鈴木

サテ話は前に戻るが辰巳屋に入つた岩治郎、最初は新米の悲しさに水を汲んだり荷札をつけたり極く些らない雜務に追廻されてゐたが砂糖のことになるとコレは良いとか悪いとか、コレは何に向くとか向かぬとか古參も舌を捲く程よく目が利く。ソレも道理、永年の間菓子屋で苦勞したのだから不思議はない。辰巳屋も「此奴は使へる」と思つたかコンなことから段々信用を得て遂に明治五六年頃に「辰巳」の屋號と共に神戸の店を貰ふことになつたのである。斯くて明治十年頃姫路銀行の頭取岡玖平の據介で姫路の西田家から迎へたのが今のおよねさんで當時芳紀當に廿二であつたとか、その間に出來たのが岩治郎、岩藏の兄弟であることは一統先刻御承知のことゝて今の幕を閉ぢた。時に兄の岩治郎が十八、弟の岩藏が十二であつた。茲に附加へておきたいのは先代岩次郎は一個の前垂掛の商人として見る他に貿易所の最後の會長、播陽銀行の前身たる貿易僞替會社——神戸銀行の頭取、神戸取引所の理事長等を勤め公人としても亦十分活躍してゐたことである。尚ほ家庭の人としては一言にして言へば極めて嶮嶮性急の質でコレには何れも大分悩まされたらしい。序にモ一ツ參考のためにいふがお家さんで通つてる現在社長鈴木よねは女の社長といふので大抵世間では「女丈夫」の一言で片付けて終ふが實は極めて温良貞淑な女大學式の女であることは息子の二代目岩公のいふことだから間違ひあるまい。鈴木一家の戸籍調べは先づコレ位にして愈本論に取掛るが何日清戰爭部分支那とは攝寸糖も矢張あるが最ルドとジに限られ年頃にジ番のプロ

ルドは一商會を代理店大阪の藤茂七の藤田助七が

時鈴木は兩替商を

この洋銀種々面白い係がない鈴木も兩替他に彼が

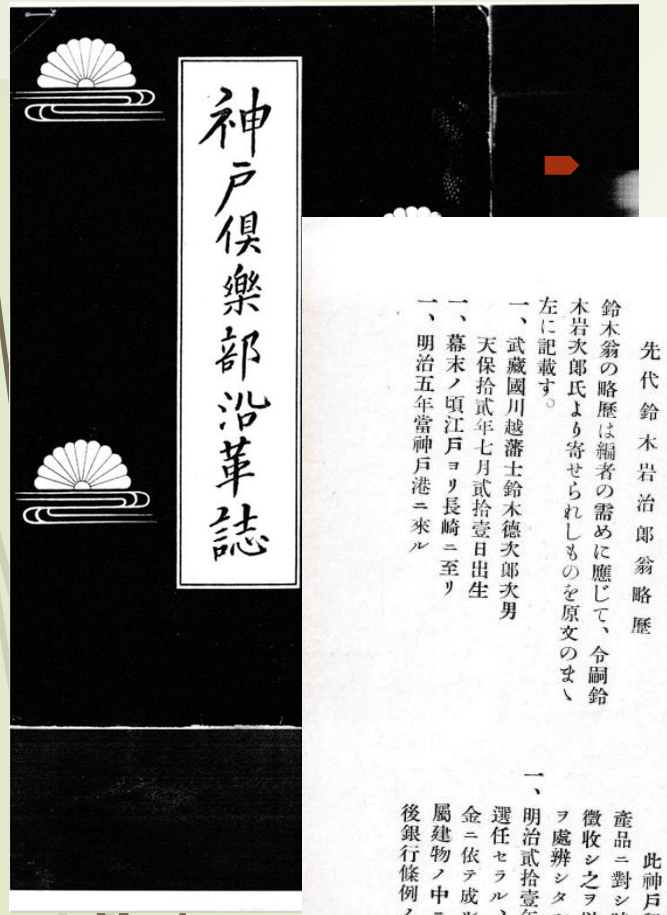
つた金銀の

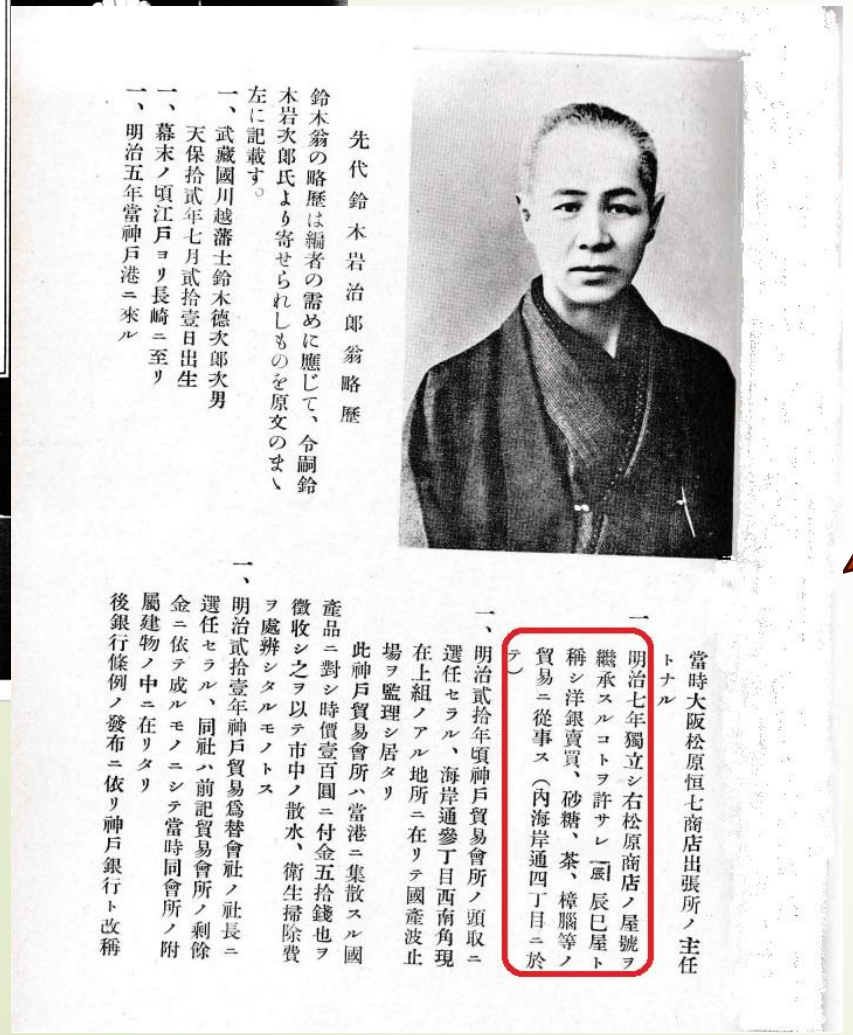
たのと、

なかつた

で鈴木は

松原商店より暖簾分け、内海岸通に辰 鈴木商店を創業





先代鈴木岩治郎翁略歴

鈴木翁の略歴は編者の需めに應じて、令嗣鈴木岩次郎氏より寄せられしものを原文のまゝ左に記載す。

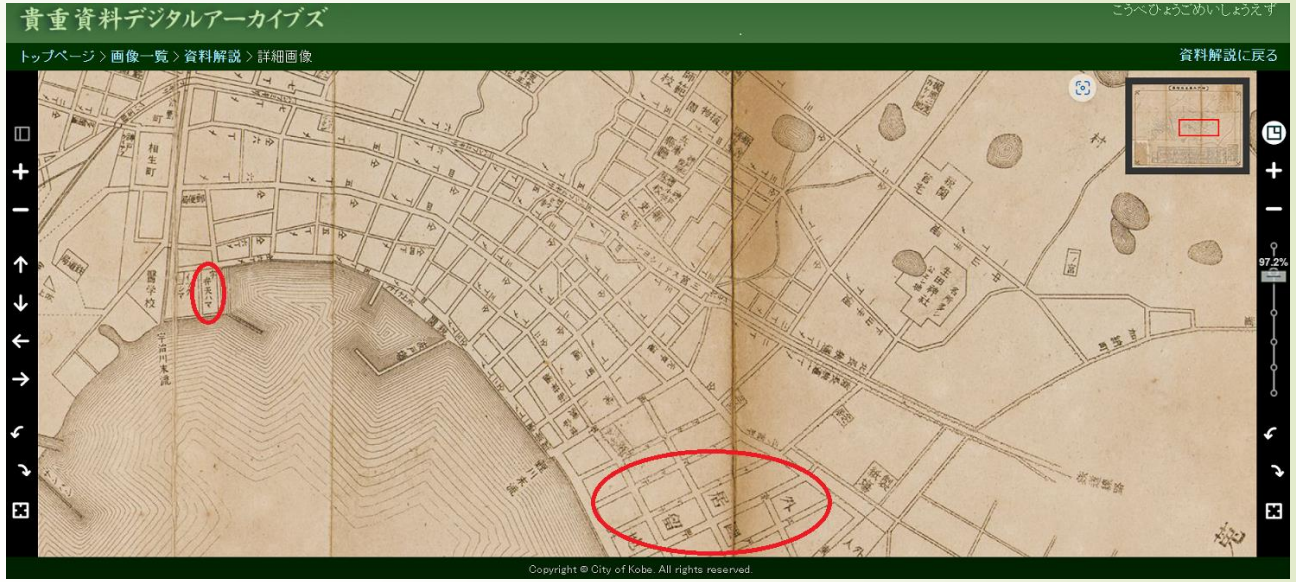
一、武藏國川越藩士鈴木德次郎次男
天保拾貳年七月貳拾壹日出生
一、幕末ノ頃江戸ヨリ長崎ニ至リ
一、明治五年當神戸港ニ來ル
當時大阪松原恒七商店出張所ノ主任トナル
一、明治七年獨立シ右松原商店ノ屋號ヲ繼承スルコトヲ許サレ辰巳屋ト稱シ洋銀賣買、砂糖、茶、樟腦等ノ貿易ニ從事ス（內海岸通四丁目ニ於テ）
一、明治貳拾年頃神戸貿易會所ノ頭取ニ選任セラル、海岸通參丁目西南角現在上組ノアル地所ニ在リテ國產波止場ヲ監理シ居タリ
此神戸貿易會所ハ當港ニ集散スル國產品ニ對シ時價壹百圓ニ付金五拾錢也ヲ徵收シ之ヲ以テ市中ノ散水、衛生掃除費ヲ處辨シタルモノトス
一、明治貳拾壹年神戸貿易爲替會社ノ社長ニ選任セラル、同社ハ前記貿易會所ノ剩餘金ニ依テ成ルモノニシテ當時同會所ノ附屬建物ノ中ニ在リタリ
後銀行條例ノ發布ニ依リ神戸銀行ト改稱

1．明治5年、当神戸港に来る
当時大阪松原恒七商店出張所の主任となる

1．明治7年独立し、右松原商店の屋号を継承することを許され、カネ辰　辰巳屋と称し、洋銀売買、砂糖、茶、樟脳等の貿易に従事す
（内海岸通4丁目に於いて）

居留地商館との間接貿易から新たな第一歩

ジャーディン・マセソン商会（83番館）



弁天浜・内海岸通から居留地

ジャーディン・マセソン商会（英）	砂糖（洋糖）	引取商
バターフィールド＆スワイア商会（英）	砂糖（洋糖）	引取商
オットー・ライマース商会（独）	樟脳	売込商
イリス商会（独）	魚油	売込商
ラスペ商会（独）	薄荷	売込商
スミス＆ベーカー商会（米）	樟脳･茶	売込商

内海岸通4丁目（後の海岸通4丁目＆栄町4丁目）より鈴木商店の歴史が始まる

◇明治7(1874)年、鈴木商店創業（岩治郎33歳）

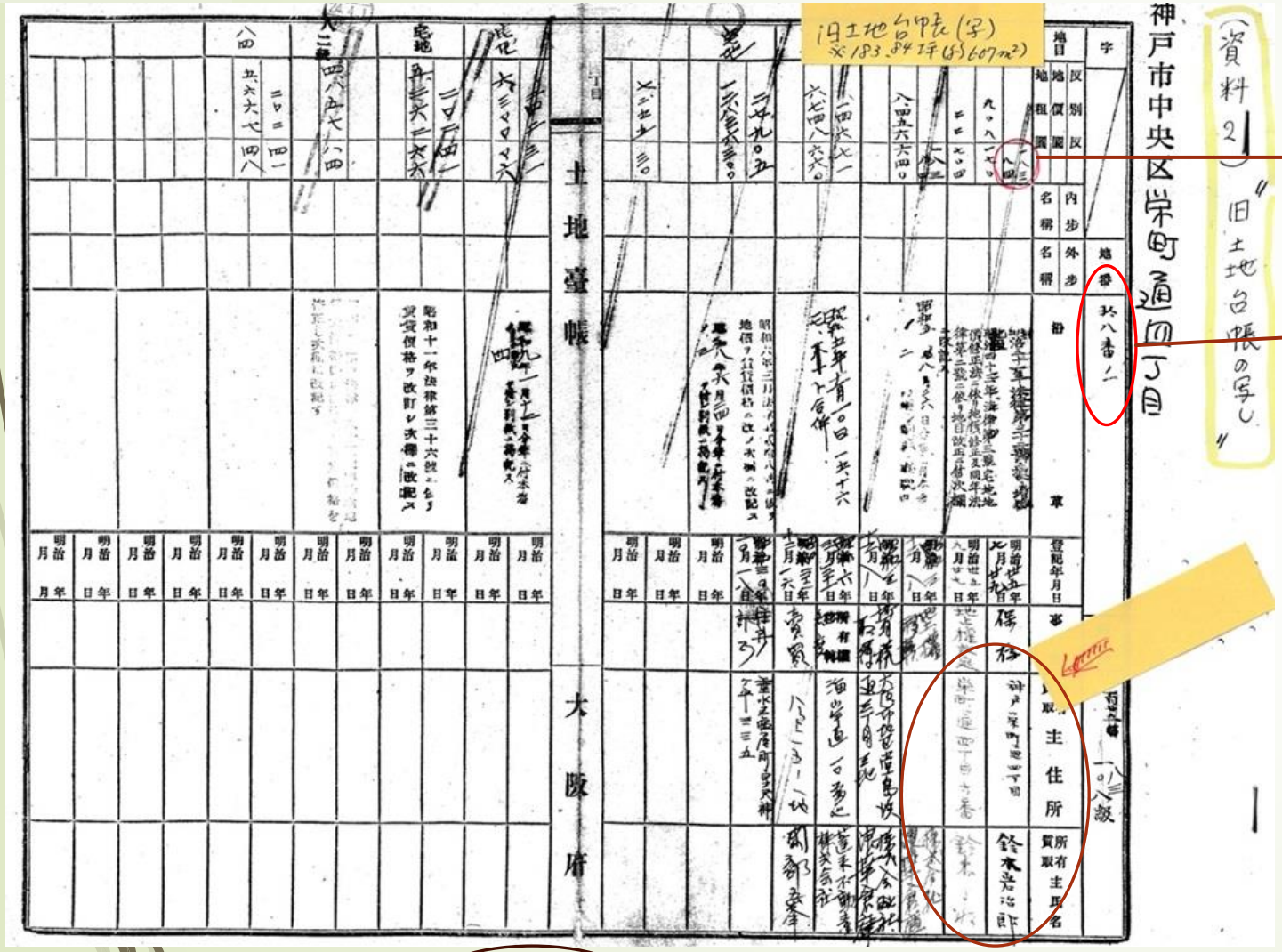
◇明治10(1877)年、西田仲右衛門3女・よねと結婚

◇明治17(1884)年、神戸貿易会所副頭取に就任

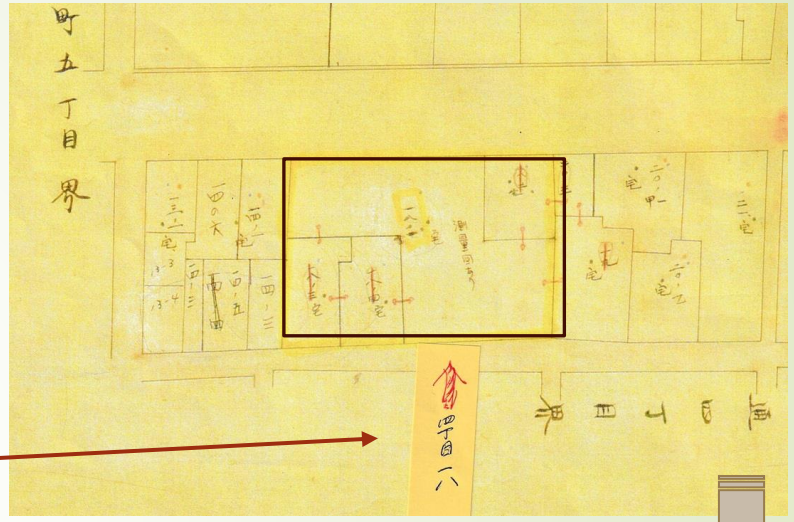
◇明治18(1885)年、柳田富士松入店（18歳）

◇明治19(1886)年、金子直吉入店（20歳）

辰 鈴木商店創業地を特定！内海岸通4丁目＝栄町通4丁目



栄町通4丁目（旧土地台帳）



栄町通4丁目18番の1（区画整理前の地図）

183.84坪（神戸市の地籍図；明治 43年）

製茶海陸產物貿易商　榮町六丁目　酒井治助　電話（一三〇四）　電報（サカヰ）

茶商　榮町六丁目一四一　園部住藏

茶商　榮町六丁目一三一　木崎伊之助

茶商　海岸通四丁目二八　山本龜太郎

K. YAMAMOTO.
TEA MERCHANT.
28, Kaigan-dori Shichome.

茶商　海岸通五丁目三八　笠松龜三郎

茶商　海岸通六丁目六　川島東吉

茶白米商　海岸通六丁目一七　鷲尾磯七

茶商及海陸產物諸商　海岸通六丁目一五　伊藤賀吉

茶商　元町一丁目二一八　龍焙園　饗庭榮次郎

茶商　元町三丁目二六三　紅茶放香堂　北熊吉

茶雜貨商　元町三丁目二六五　竹內菊松

茶及石炭商　元町六丁目一五二　成尾つね

製茶商　元町五丁目二七五　平砂重吉　電信符號ヒラサ

J. HIRASUNA,
TEA MERCHANT.
275, Moto-machi Gochome.

茶商　元町六丁目四五ノ四　勝森新助

茶商　元町六丁目一七〇　山內友吉

T. YAMAUCHI,
TEA MERCHANT.
170, Moto-machi Rokuchome.

茶菓子砂糖商　北長狹通二丁目二四　小林幸吉

茶再製輸出　相生町一丁目七二　日本製茶輸出株式會社

大阪博覽會名譽金牌受領

JAPAN TEA EXPORT CO.
TEA MERCHANT.
72, Aioi-cho Itchome.
Awarded the Premier Gold Medal at the Osaka Exhibition, 1903.

茶小賣商　多聞通五丁目四　中村長吉

茶菓子商　多聞通三丁目五　菅園音次郎

茶商　兵庫北仲町三六　梅林堂茶舖　石田幸治郎

樟腦商

樟腦商　元町三丁目二五　濱田楠次郎

樟腦仲買　榮町四丁目四五　鈴木よね

樟腦貿易商　榮町通五丁目七十九番　逢田平吉　電話（四八〇）　電報タホタ

樟腦貿易商　雲井通五丁目三九　住友吉左衛門

樟腦再製　今和田新田三ノ一　小松楠彌

栄町通4丁目

鈴木商店モニュメント　　エスタシオン・デ・神戸

かつて鈴木商店があった場所に建つ
和田ホール＆パーキング （栄町通側）

“コンフォート To You” （海岸通側）

以上で「幻の総合商社“鈴木商店”誕生」の講演を終了させていただきます。

ご清聴有難うございました。